

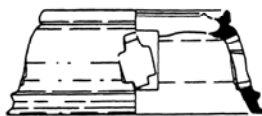
## 卒業論文概要

## 古代北陸における円面硯の形態的特性

神殿和志

古代北陸の陶硯については、主に吉岡康暢氏の論稿がある。吉岡氏は、檜崎彰一氏による全国的な型式分類に従いながら、北陸7国の陶硯についての型式分類・地域性を論じている。ただし、北陸地域型の設定という課題が残されており、そのための素材が必要となっている。そこで本論では、地域型の設定に近づくことを目的とし、まずは陶硯の中でも出土量の最も多い円面硯に絞って、北陸内における形態変化や地方色をしっかりと捉えたいと考えた。

分析にあたっては、南の若狭国から佐渡国までを、郡単位に分けて製作時期の古い資料から順に概観した。時期に関しては、製作時期の傾向を考慮し、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期以降の3段階に分けて考えている。そして各報告書等を参考にそれぞれの資料の特徴を整理しながら、国単位、郡単位に見られる類似点や相違点を探った。その時に着目した個所として、型式・脚台部・硯面部・突帯・全体的な大きさ、形態、精巧度が挙げられる。同時に、遺跡種別についても留意し、円面硯の形態的特性と関係があるかを考えた。



有堤式円面硯  
(古沢窯出土)

その結果得られた結論としては、形態的に着目した各部において、越前～越中にかけては一定の流れで変化していたことが分かった。(1)

型式については、基本的には時期を3段階に分けた順に、無堤有溝式 有堤式 無堤無溝式という流れになっている。(2) 脚台部に関しては、初期の透しは数が多く、大きさも大きく穿たれているが、時代を追って少なくなっていく、Ⅲ期以降になるとなくなったり、あっても小さくなる。(3) 硯面部の作りについては、陸部は平らな作りからⅠ期に入り弧状に隆起させるようになり、Ⅲ期以降は縁部よりも高い位置にくるようになっていく。海部は初期段階で決まった形態はなかったが、徐々に浅くなっていき、Ⅲ期以降には海部と

しての機能を果たし得ない資料も出てくる。堤は有堤式の内堤において、Ⅰ期は誇張させた作りであり、Ⅱ期までは縁部と同じ高さかそれより少し高く作り、しっかりと陸と海を隔てているが、Ⅲ期以降には低く、小さなものになる傾向がある。(4) 突帯については、Ⅰ期はしっかりとした作りで付けられているが、徐々に小さくなり、Ⅲ期代には微弱化した資料が出現し、Ⅲ期以降になると省略された資料が多く見られるようになる。(5) 全体的には、初期の資料は大型で重厚感のある秀品が多いが、Ⅲ期代から小型で薄手作りの資料が出現し、Ⅲ期以降になると器形や作工が当時の日常容器と同じになっていく。以上のような流れの中でも、加賀北部～越中西部では、初期から様々な型式が作られたり、特殊な透しや形態が存在したりと、北陸内でも先行的で、製作の中心地であったと思われる。そしてこれらの流れ・特徴を、北陸における円面硯の形態的特性と考えた。一方で、各部の特徴が悉く越中以西と異なった越後・佐渡においては、同じ北陸地域ではあるが、円面硯の製作に関しては東国の影響を受けていたと指摘した。また若狭国においては、資料数が1点のために考察の対象にはできなかった。